

『蜻蛉日記』上巻46、48番の贈答歌を中心とした記事の考察 —道綱母にとつての和歌、兼家との贈答歌—

堤 和博

はじめに

誰も濡るらむ(20・道綱母)

本稿は、本誌前号掲載の拙稿『蜻蛉日記』上巻の「返し、いと古めきたり」考―道綱母と兼家の贈答歌の問題を中心に―⁽¹⁾で巡らした考察を主として踏まえ、問題意識を継承して成したものである。便宜上、以下この論文を「前号掲載稿」と呼んで論述を進める。

『蜻蛉日記』上巻一年目の九五四年の十月、兼家からの贈歌、

嘆きつゝ返すころもの露けきにいと空さへしぐれそふ
らむ(19・兼家⁽²⁾)

に対する自らの返歌を記す際、

返し、いと古めきたり、

思ひあらばひなましものをいかでかは返すころもの

というように、わざわざ波線部「返し、いと古めきたり。」を書き加えていることを、前号掲載稿では取り上げて考察した。

その際、当時の道綱母にとつて、和歌が、特に兼家との贈答歌が、いかなる意義を持っていたのかを精察しながら考察を進めた。その過程で浮かび上がってきた諸点を、本稿で展開する論とも拘わるところを中心に纏めると次のようになる。

◎道綱母は、理想としては兼家からの贈歌で始まる贈答歌の成立を求めていた。それが二人の愛情の確認に繋がると思っていた。

◎愛情確認には、返歌で贈答歌の内容に鋭く切り返すことも必要だと思っていた。

◎結婚成立後は兼家からの贈歌はめつきり少なくなり、自ら歌を贈ることが多くなった。

これらの点を踏まえながら問題の波線部「返し、いと古めきたり。」が書き加えられた理由について検討し、19番歌前後では兼家からの贈歌がめつたになくなった中で、珍しくあつた兼家の贈歌に対し、鋭く切り返す返歌を贈ることで愛情確認をしたかったのに、切り返しとしては緩い20番歌しか贈れなかった忸怩たる思いが執筆時に甦ってきて、わざわざ記されたものが波線部であると結論した。

また、上記の論を補強するため、20番歌を詠んだ以降の二年間程の記事も併せて検討し、次のような諸点も明らかにした。

◎道綱母自ら贈歌する場合は、鈴木一雄³⁾氏が分析した「女からの贈歌」がなされる場合に当て嵌まる。即ち、「男との仲の危機あるいは悪化」が見られる時に、「女のあせり、歎き、訴え、渇きなどの強調」が歌でなされる場合である。

◎町の小路の女の出現後、道綱母は感情が昂ぶると兼家に對しては歌を詠めなくなり、その代わりにと言つてよからう、時には時姪に歌を贈ったり、あるいは歌語り享受などに向かうこともあつた。

本稿では、前号掲載稿で考察対象とした範囲よりは後に位置する46、48番の贈答歌を中心とする場面を取り上げ、道綱母にとつての兼家との贈答歌の意義を踏まえながら、叙述に表れている面よりむしろ、道綱母の実際の感情乃至は二人の実際の夫婦仲について考えたい。

—
当該の場面は次のように記述されている。

いかなる折にかあらむ、文ぞある。「参りこまほしけれど、つましうてなむ。たしかに『来』とあらば、おづ／＼とあり。返りこともすまじと思ふも、これかれいど情なし。あまりなり」などものすれば、

ほに出でていはじやさらにおほよそのなびく尾花に
まかせても見む (46・道綱母)

たちかへり、

ほに出でばまづなびきなむ花薄こちてふ風の吹かむ

まに／＼ (47・兼家)

使あれば、

あらしのみ吹くめる宿に花薄ほに出でたりとかひや

なからむ (48・道綱母)

など、よろしいひなしで、又見えたり。

先に掲げた19、20番の贈答歌のあつた翌年八月末に道綱が誕生し、その翌月に兼家が町の小路の女に出そうとしている手紙を道綱母は発見し、26番歌を書き付ける。ここからは、町の小路の女が存在が軸となつて事態が推移していく。兼家と町の小路の女の結婚、兼家を門前払いして『百人一首』に載

る歌（27番）を詠んだりしたことも経て、九五七年夏には町の小路の女が男児を出産、七月になって仕立物の依頼がきてそれを突き返す所で道綱母の怒りは頂点に達した感がある。町の小路の女の出産の時も仕立物の依頼の時も、歌を詠むこともできない程であった。その仕立物の依頼の件の直後に記載されているのが当該の場面である。

この場面においては、和歌の問題より先に、兼家からの手紙の文面に続く傍線部から波線部にかけてをまず問題にしておかなければならない（二重線部には第七節で言及する）。兼家から、「参上したいけれども、遠慮される。はつきりと『来い』と言ってくれば、恐る恐るも（伺おう）」という手紙が来たのに、道綱母は返事を出そうとは思わなかったと言（傍線部）、それを、「これかれ」と言うのは侍女達であろう、侍女達に嗜められたので歌で返したと言う（波線部）のである。

これをどう理解すればよいかを問題にしたいのだが、この描写が、仕立物の依頼がきて怒りが頂点に達し、またそのせいで歌も詠めなくなっている状況の描写の直後にあることも加味してであろう、道綱母が傍線部のような反応を示したのは、仕立物の依頼の時の怒りをそのまま引きずっているからであり、それを波線部で侍女に宥められて渋々返事を出したと見なすのが通説である。

『蜻蛉日記』の叙述をどう読み取るかという観点からすると（この観点には最終第九節で改めて言及する）、以上の読

みは必ずしも間違いだとは言えないと思う。しかしながら、この時点における道綱母の実際の感情、乃至は、二人の実際の夫婦仲はどうであったのだろうか。そのところを焦点に据えて本稿では考えていきたいのである。

二

傍線部から波線部にかけての問題には、道綱母の侍女の性質を取り上げた『解釈』掲載の拙稿「『若き御心（心地）に』考—『蜻蛉日記』上巻の侍女の言葉⁽⁵⁾—」で言及している。以下この拙稿を「解釈掲載稿」とし、後の論述との関連で必要だと思うので、暫くは解釈掲載稿の相応の部分の内容を敷衍して繰り返すのをお許し願いたい。

当該の場面の記述は、仕立物の依頼の件の記述に直接してはいるものの、冒頭の「いかなる折にかあらむ」という書き様からして、時間的には仕立物の依頼の件より少なくともいくらか経過していることに気をつけなければならない。それは、この場面以降も幾組かの贈答歌を中心とする場面が続く（49番歌、51番歌、52番歌、53番歌、56番歌、最後の57番歌の道綱母の歌に対する兼家の返歌はなし）、そして、兼家に見捨てられた町の小路の女に対する憎悪を書き連ねる例の有名な記述がくるのだが、その最初の所で、

かうやうなるほどに、かのめでたき所には、子産みてい

より、すさまじげになりたへかめれば、人憎かりし心、思ひしやうは……

と書いていることと関連してである。つまり、町の小路の女が兼家の興味を失いつつあったのは、仕立物の依頼の件のさらに前の町の小路の女の男児出産後からであったのが傍点部から分かり、ならば、当該の場面と町の小路の女が零落していくのとは同時進行であった筈なのを見逃してはならないのである。そして、傍点部のように書くからには、兼家が町の小路の女に興味を失いつつあるのに道綱母も当然勘づいていた筈なのであり、その点も勿論重要となってくる。

そうすると、道綱母の町の小路の女に対する怒りなどの気持ちは、この時点でかなり軟化し始めていたのではないかと考えられるのである。

現代とは違い所謂一夫多妻であった時代の女性の気持ち、それも現代から遠い古代の女性の気持ちを的確に言い当てるのは難しいが、道綱母は、自分の妻としての地位は思っていた程の危機でもなかったと感じ始めていたのではないか。同時に、兼家を許してもよいと思ひ始めていたのではないか。以前にも問題にしたことがあるが、そもそも兼家に新しい妻ができることは、道綱母には結婚前から予想できていた筈である。そういう教育を道綱母は受けて育った筈である。よって、よく論じられるように、道綱母の町の小路の女に対する嫉妬や激情は自分の妻としての地位に危機を感じたことが大

きいのであろう⁽⁸⁾。さすれば、自分の妻としての地位に与える町の小路の女の影響を心配する必要はなさそうだと分かれば、気持ちが落ち着いてくるものであろう。

兼家にしても、町の小路の女に興味を失いつつあって久々に道綱母の顔を見たくなって手紙を出したのであろう。その文面も、一見道綱母の怒りに恐れをなしているようであるが、現代でもありそうな冗談めかした誇張とも思える。そもそも手紙を出したこと自体、道綱母の気持ちが軟化しつつあったのに勘づいていたからであらう。兼家の手紙の文面は、磊落と言われる兼家が、このような状況下で書いたものとしてびつたりだと思ふのだが、いかがであらうか⁽⁹⁾。

ではなぜ道綱母は傍線部のような態度を表したのであろうか。そこに私は、上巻前半部における侍女達の性質から迫ってみた。道綱母が本当に怒っている傍線部のような態度に出たとしたら、道綱母の当時の侍女達がそれを波線部のように窘めるとは考えにくい。それより、侍女達は道綱母に迎合するような者達であつたらしい。仕立物の依頼がきた時、「見るに目眩るゝこゝちぞする」という道綱母の様子を見て、「すゞろはしや、えせでわるからむをだにこそ聞かめ」と衆議して仕立物を突き返したのなどはその典型である。よって、波線部の発言は、道綱母が内心では兼家に返事を出したいのに躊躇しているからこそその気持ちを付度し、嗜める体でもってなされた可能性が高いと思う。一言で言えば侍女の機転である。実際のところは、道綱母は主として侍女の手前素直に

なれなかったであろう。兼家から手紙が来た、関係修復の切っ掛けにできそうだ、さあ返事を書こう、とはいかなかったのである。そんなことで道綱母は傍線部のような態度に出たのであるが、侍女達は道綱母の内心を見透かして、波線部の発言に及んだのである。¹⁰⁾

三

さて、解釈掲載稿で巡らした以上の論を踏まえた上で、道綱母の46番歌について考えていく。まずは、今の論とも関連して、道綱母が兼家に対して歌を詠んで贈っていること自体、感情が落ち着いていることの表れであることを確認しておきたい。兼家が町の小路の女と結婚して暫くしての頃に『百人一首』に載る27番歌を兼家に贈って以降は、道綱母は兼家に歌を贈れなくなり、時姫など別人に歌を贈ったり歌語りを享受したりする方が目立ってくる。例外は、40番を贈った時と、43～45番の贈答歌が成り立った時¹¹⁾だけである。町の小路の女の男児出産から仕立物の依頼の時にかけても、怒りの感情等は露わにするが、歌は詠んでいない。ところが、仕立物の依頼の次の記事である当該の場面では46番歌を詠むのである。よって、歌を詠むこと自体が、道綱母の感情の落ち着きを表しているのとみてよいと思うのである。

では46番歌の内容はどうであろうか。46番歌は、兼家の希望、即ち『来い』と言って欲しい』という希望を拒否した

ものには確かになっている。その点道綱母は怒っているようだ。しかし、来訪そのもののまでは決して拒否していないし、兼家の来訪の希望を疑ってもいない点にも注意すべきだと思う。即ち、下句を見ると、来るか来ないかは風任せにしよう、つまり、あなた任せにしようと言っているのだが、道綱母の機嫌が本当に悪ければ、来訪をも拒否するか、来訪の意思を否定してかかる内容になったのではなからうか。というようなことを内容面からは感じるのであるが、本稿の冒頭でも触れた通り、前号掲載稿での考察を踏まえ、和歌特に兼家との贈答歌の問題を視野に入れた説得力ある考えを、内容面を巡っても出していきたい。

そこで気に掛かるのが、兼家の手紙から46番歌にかけては、結婚成立後、兼家から手紙があつても和歌が添えられておらず、道綱母はその点に不満を覚えながらも歌で答えるという形(15、16、18、23番歌)と同じになっている点である。前号掲載稿でこのような状況を取り上げ、先に触れた鈴木一雄氏が「男との仲の危機あるいは悪化」した時に「女のあせり、歎き、訴え、渇きなどの強調」がなされることが多いと分析した「女からの贈歌」の場合に当て嵌まる状況になっているのではないかと考えた。これらの場合と46番歌の場合を比較するため、「女からの贈歌」を鍵語として、これらの場合について改めて分析しておきたい(前号掲載稿の補足を兼ねて)。

四

最初に15番歌からである。

かくて、あるやうありて、しばし旅なる所にあるに、物
して、つとめて、「けふだにのどかにと思ひつるを、便
なげなりつれば。いかにぞ。身には山隠れとのみなむ」
とある返りごとに、たゞ、

思ほえぬ垣ほにをればなでしこの花にぞ露はたまら

ざりける（15・道綱母）

などいふほどに、九月になりぬ。

15番歌は、兼家と一緒に過ごせずに涙が溢れるという訴え
に終止し、「注解四」によって「兼家の愛情を求める可憐な
風情をもつた歌」と評されているものである。この歌は、新
枕の後朝の贈答歌（11・12番）と結婚成立の後朝の贈答歌（13
・14番）に続いており、それらの内容と同様に女が男に縋るよ
うな歌になっていると見なせる。前号掲載稿では、新枕及び
結婚成立時の後朝歌の内容は、男女間の贈答歌の中にあつて
は特殊（男の歌への切り返しの際酬とはならず、女が哀情を
訴える）なので考察の対象から外したのであるが、15番歌も
同様に処置しておくべきであつただろう。

「女からの贈歌」という観点から15番歌を見ても、内容は
ともかくとしても、特に「男との仲の危機あるいは悪化」と

いう面は問題とはなっておらず、「女からの贈歌」には当て
嵌まらないと思うのである。

よつて、重要なのは16番歌以下ということになる。

つごもりがたに、しきりて二夜ばかり見えぬほど、文ば
かりある返りごとに、

消えかへり露もまだひぬ袖のうへにけさはしぐるゝ
空もわりなし（16・道綱母）

たちかへり、返りごと、

思ひやる心の空になりぬればけさはしぐると見ゆる

なるらむ（17・兼家）

とて、返りごと書きあへぬほどに、見えたり。

15番歌が詠まれた後に「九月になりぬ」とあり、16・17番歌
の遣り取りがあつたのが「つごもりがた」だから、その間二
十五日前後は経過していよう。この一月足らずの間に、道綱
母は徐々に兼家との仲の「危機」乃至は「悪化」、即ち夜離
れを心配するようになっていたのではないか。それが現実にな
つたのが傍線部「しきりて二夜ばかり見えぬほど」という
ことだろう。もつとも、客観的に考えれば、この程度では「危
機」「悪化」どころか甘い新婚生活の継続というところであ
ろうが、道綱母の主観では違つたのであろう。よつて、これ
などは「女からの贈歌」に少なくとも近づいているとは言え
る。

内容を見ても、特に結句は「空を恨むのは、兼家を恨む心につながる」と「全注釈」等が読み取っている通りで、この点だけでも「女のあせり、歎き、訴え、渇きなどの強調」になつており、「可憐な風情をもつた」15 番歌との差も明らかだと思ふのである。

ところで、先程 15 番歌の検討の際に一言引き合いに出した結婚成立時の後朝の贈答歌（13 14 番）は、次のようになってゐる。

しのゝめにおきけるそらは思ほえであやしく露と消えかへりつる（13・兼家）

さだめなく消えかへりつる露よりも空頼めするわれは何なり（14・道綱母）

見ての通り、16 番歌とは露や空を詠み込む点が共通している。そこで試みに、14 番歌と 16 番歌を、内容面から比較してみたい。

14 番歌も「空頼めするわれ」と言つて、兼家を信頼できないことを訴えているようである。しかしそこから「われは何なり」と収斂していつて、兼家が 13 番歌で訴える別れて帰つて来た苦しみよりも、自分の方がはかない思いをしていると結局は訴えているのである。つまり、兼家の不実に焦点は中つておらず、16 番歌が「空もわりなし」で閉じられて兼家への恨みに収斂していつているとの差は明白だと言えるであ

ろう。このように、後朝の返歌との内容の比較においても、16 番歌は「女からの贈歌」に当て嵌まると思ふのである。

続いて 18 番歌を見てみる。

又、程経て、見え怠るほど、雨など降りたる日、「暮に來む」などやありけむ、

柏木の森の下草くれごとになほ頼めとや漏るを見る
見る（18・道綱母）

返りごとは、みづから来て、紛らはしつ。

事態は傍線部のごとく兼家が「見え怠るほど」になる。どの程度を「見え怠るほど」と言っているのかにもよるが、16 番歌の時よりは余程「危機」「悪化」らしくなつてきたのは確かであろう。そんな中で、兼家は「暮に來む」と言つてくるのである。このように兼家が来訪の意思を示すのは 46 番歌の状況と類似しているが、18 番歌の内容からすると、道綱母はそれを信用できないと訴えている点は大きく異なる。例えば「集成」は、「哀艷な調べだが、「なほたのめとや」には、強く相手に反問し釈明を求める語勢がある。」（傍点原文）と評している。また、この歌は『後拾遺和歌集』巻十六・雑二・903 番に採られているが、新日本古典文学大系が「空頼めさせることが多い夫に抗議する妻の歌。」と評している。詠まれた状況と言ひ、内容と言ひ、18 番歌が「女からの贈歌」

に当て嵌まるのは、明白だと思うのである。

この後前号掲載稿で取り上げた1920番の贈答歌の場面があり、陸奥に旅立つ父倫寧との別れの場面があり、そして23番歌を詠む場面になる。

十二月になりぬ。横川に、物することありて、のぼりぬる人、「雪に降りこめられて、いとあはれに恋しきこと多くなむ」とあるにつけて、

こほるらむ横川の水に降る雪もわがごと消えて物は

思はじ(23・道綱母)

などいひて、その年はかなく暮れぬ。

23番歌については、詠まれた状況を最初に問題にしておかなければならないと思う。そこで「全注釈」の評が分かり易いので引いておく。

雪をおかしてまで文使を立て、帰れぬことわりを告げたのは、兼家の下山予定の日を知っていて訪れを待ちわびる作者の気持が、兼家にわかつていたからに違いない。

(中略) 作者の歌は、兼家の思いやりを受け止めた上での訴えである。

兼家の横川登山は道綱母に対する不実とは無関係なのは勿論で、それに「全注釈」の想定も加味すると、状況は「危機」「悪化」とは正反対になる。

また、23番歌の内容に関しても「全注釈」は右の評に続け

て、「そこに両人の愛情表現のやりとりが成り立っている。」と評する。

しかし、23番歌をよく見ると、兼家を雪に喩えて、自分が消え入るほどの物思いをしているが、あなたはそうではあるまいと訴えており、その点「女からの贈歌」らしいとは言えないであろうか。「両人の愛情表現のやりとりが成り立っている」にしても、道綱母の愛情は、兼家は物思いをしておるまいと訴える歌によって表されている点に注意したいのである。

五

以上、鈴木一雄氏の「女からの贈歌」を鍵語として、道綱母の方から兼家に詠み掛けた歌を見てきた。その上で46番歌について気になる点は、やはりその内容が、先に述べた通り、兼家の来訪をも拒否するでもなく来訪の意思を否定するでもないものになっている点である。つまり、46番歌からは「女」のあせり、歎き、訴え、渇きなどの強調¹⁾が感じ取れないのである。

端的に言い換えると、15番歌を除けば「女からの贈歌」になっっているのに対し、46番歌はそうとはなっていないのである。あるいは23番歌も「女からの贈歌」とは言えないかもしれないが、それにしても、兼家より自分の方が深い物思いに耽っている点と訴えている点は、46番歌とは違うと思うのである。

る。

ところが、46 番歌が詠歌された状況を客観的に考えると、町の小路の女の存在が完全に消えたわけでもないので、町の小路の女が現れる前の 16・18・23 番歌の時などより余程の「危機」「悪化」を認識してもよさそうでもある。でも、ここでの道綱母にすれば、前述の通り、兼家が町の小路の女に興味を失いつつあり、妻としての地位が好転する方向にあると思われたことが肝要なのであろう。それで、46 番歌のような内容の歌を詠っているのは、取りも直さず、「女のあせり、歎き、訴え、渇きなどの強調」をする必要が感じられていないからだと考えるのである。これも前述の通り、道綱母の町の小路の女に対する感情は、既に軟化しているのである。

少し見方を変え、兼家が手紙で言ってきたことを言わば贈歌と取りなし、それに言わば返歌を贈る体で 46 番歌を返しとしたらどうだろう。その場合は、前号掲載稿で強調した通り、兼家の手紙の内容に鋭く切り返している歌になっていないくはならない筈である。そのような返歌を贈ることが、愛情の確認に繋がると道綱母は思っていたであろうと考えられるからである。しかし、これが返歌としても、というか、返歌でもしあるならば余計に、鋭い切り返しとはともなっていないのは明白であろう。

結局、当該の場面での道綱母は、歌によって愛情を確認する必要を、少なくとも切実には感じていないと言えるよう

である。

六

次に当該の場面で詠まれた残りの二首もみておきたい。

兼家の 47 番歌は、新たな掛詞「こち」（東風・此方）も詠み込んでうまく纏めてはあるが、46 番歌の修辞を襲いながら、自分の手紙の内容を繰り返したに過ぎないとも言える。これくらい歌を創るのは、兼家にしたらどうということとはなかったのではないか。

48 番の道綱母の歌になると、やや様相が違ってくる。修辞面では、「あらし」（嵐・あらし）と「かひ」（頼・効）という新たな掛詞を二つ詠み込み、内容面では、下句で兼家の来訪の実現を否定して 46 番よりも余程切り返しらしくなっている。

ところで、贈答歌で二人の愛情を確かめようとしているらしいこれまでの道綱母なのであるが、道綱母の贈歌から始まり道綱母が三首目を返す 46・48 番と同じ型の贈答歌は、『蜻蛉日記』のここまでを見る限りでは、町の小路の女の出産の直前に描かれた 43・45 番の一組しかない。ただし、強いて挙げるともう一組だけある。それは、問題としている場面の前年九五六年六月初旬に道綱母が独詠歌（36 番）を詠み、翌月にそれを侍女から見せられた兼家が返歌の形で 37 番歌を詠み、そして道綱母が 38 番歌を詠んでいる所である。さらに兼

家の贈歌で始まり兼家が三首目を返す贈答歌にまで目を拡げるともう一組あるのだが、これは『蜻蛉日記』には載せられていなくて、『後拾遺和歌集』巻十四・恋四・822〜824番に採られているものである。¹⁷⁾

このように、記録に残る限り二人の間での三首目まで続く贈答歌は、これまでに三例しかない。よって、48番を贈ったのには、何か特段の理由がありそうだ。それはもしかしたら、46番歌の内容が緩いものだったとの自覚があり、改めて少しでも切り返しに相応しい歌を贈りたいとの意識からではないだろうか。それで、歌の直前に「使あれば」とある通り、¹⁸⁾使いがまだ残っていたのを利用し、48番歌を託したとは考えられないだろうか。もともと、使いが残っていたのを、兼家が三首目を欲しているからだとか察したとか、あるいは、たまたま使いが侍女達とおしやべりをするか何かで残っているのを知り、それならばと三首目を詠んだとか、三首目を返した理由を深く考える必要はないのかもしれない。しかしその場合でも、46番歌の内容が緩いものだったとの自覚があったればこそ、改めて少しでも切り返しに相応しい歌を贈りたいとの意識が生じ、48番歌のような歌が詠まれたとは言えるのではないか。

七

和歌の問題は以上として、一旦纏めに移りたいのだが、そ

の前に、二重線部「など、よろしいひなして」の問題が残っているのを、検討しておく。

取り敢えず最初に、「など」が指し示す範囲と、「よろしいひなして」の意味を確定しておかなければならないが、「注解十一」の説明に尽きていると思う。全体を引用したいがかなり長くなるので控えるとして、結論のみを引くと、「など」は兼家の手紙から48番歌迄を指しているとき、「よろしいひなして」は「いい加減な応答のひとつきりがあつて」と訳すのである。

そうすると、問題はなぜ「いい加減な応答」と自ら言ったのである。それはやはり、主として46番歌の内容の緩さからであろうと考える。ここに引かかって緩さを挽回しようとしたらしい48番歌も含め、そして兼家の手紙や勿論47番歌も含めて、特に町の小路の女の出現後暫くくらしい迄の緊張感のある作歌に比べ、「いい加減な応答」と言わざるを得なかったであろう。

ということ、二重線部に至るまでの所を纏めておくと次のようになる。この纏めは、本稿で主張したいことの主眼ともなるので、前号掲載稿での検討内容も含めて纏めておいた。

結婚前までは兼家の方から歌が贈られ続けたのに、結婚成立後はめつきり数少なくなり、兼家から手紙がきても歌は添えられない。兼家から手紙がなかった時も含めて道綱母は自ら歌を贈るのだが、その時は、兼家との仲が「危機」「悪化」

を向かえているのを感じ「歎き」などを歌に託したのだった。また、兼家と贈答歌が成り立つ時は、返歌で兼家の訴えに鋭く切り返すことで愛情の確認がなされると思っていた。そんな中で、たまさかに贈られてきた兼家からの贈歌19番に対し、20番歌で鋭く切り返すことに失敗したという忸怩たる思いが、20番歌の前に「返し、いとふるめきたり。」という一句を書き加えさせた。道綱出産後には町の小路の女が出現し、その時は26番歌を詠めたのであるが、以後は兼家に対してともに歌を詠めなくなることも多くなる。そんな場合は歌語りの享受などで歌を詠む代わりとすることもあった。町の小路の女の男児出産、続く仕立物の依頼の所で怒りは頂点に達したようで、歌も詠んでいない。

ここで事態は急変する。兼家が町の小路の女に対する興味を失ったのである。この時、道綱母にとっての事態の悪化度が急に低下したわけでもなさそうにも思える。町の小路の女の存在が完全に消えたのでもないから、前号掲載稿で考察した町の小路の女の出現前の時よりも悪かったと言えるかもしれない。しかし、道綱母にすれば妻としての地位の危機感がこれまでよりもここで薄らいだのは確かで、その点が重要だと思われる。よって、町の小路の女の存在が完全に消えたわけではないが、町の小路の女のために兼家への詠歌をやめたり来訪を拒否したりする感情も薄らぐのである。そこでとにかく46番歌を詠んだのであるが、このような状況で詠まれたものだから、内容は緩いものになってしまった。48番歌では、

そこを挽回しようとしたとも思われる。いずれにしても、ここまで歌、特に兼家との贈答歌を梃子にして生きていた道綱母にすれば、この場面での46く48番歌の遣り取りが、発端の兼家からの手紙も含めて、緊張感のない遣り取りであったと感じられ、その思いが執筆時にもあり、「よろしいひなし」という言葉が書き加えられたのであろう。

八

稿を閉じる前に、付随する問題にも一二触れておく。

まずはこの後どうなったのかを確認しておきたい。この後も57番歌の所までは、二人の仲は基本的に同様の様相を保つと考えている。もつとも、通説的にはそのようには考えられていない部分もあり、特に57番歌を中心とする場面などは、強雨の中を出掛けようとする兼家を57番歌で引き留めようとして失敗しているので、「注解十二」によって「和歌を支柱として抱きしめてきた心的世界の、あまりにもはかない崩壊」が指摘されたりもしている。が、私としてはやはり、實際問題としては、町の小路の女の零落する中で二人の仲が修復している線で見えられると思っている。つまり、和歌で兼家を引き留められなかったことを、通説のように深刻に受け止める必要はないと考えている。ただし、歌に対する意識や、二人の仲における歌の役割は変化してくると考えている。ここで詳しく分析する紙幅はないので、49く56番歌の場面共々別

稿で論じたい。

さらにその後であるが、町の小路の女に対して憎悪を書き連ねてから、次のように記述する。

今ぞ例の所にうち払ひてなど聞く。されど、ここには例のほどにぞ通ふめれば、ともすれば心づきなうのみ思ふほどに、ここなる人、片言などするほどになりてぞある。出づとては、かならず、「今来むよ」といふも、聞きもたりて、まねびありく。

特に前半は例によって曖昧な表現となっているが、要するに、自分のもとに戻ってくると思っていた兼家は時姫の所に帰ってしまったというのであろう。それが寂しく、道綱が兼家の口まねをするにつけても一層寂しさが募るといふのが後半であろう。

とすると、事態はまた「悪化」「危機」の方向に向かい始めたことになる。それで、普通なら何度も引き合いに出している前号掲載稿で分析した状況を繰り返すところだと思ふが、流石と言えはいいのか、道綱母は思いがけない行動に出た。自分の方から長歌を贈ったのである（58番歌）。これなども私の論に沿えば、一度は関係修復に向かい、46く57番歌の場面を経過しているからこそ、改めて関係の「悪化」又は「危機」に直面した時に、自分から贈歌して「女のあせり、歎き、訴え、渴きなどの強調」をぶつけるのに普通の歌では

飽きたらず、長歌にそれらを込めて贈った、と説明できると思ふのである。

長歌を贈ることはとにかく奏功したようだ。兼家からきた返長歌については、特に内容面の評判が悪く、それを道綱母がどう受け止めたかは議論のあるところだが、返歌があったことに少なくとも一応は満足しただろうと私は考えている。それが長歌に続く60く64番の贈答歌の応酬をよぶのである。ここでまた本稿で分析した場面と同様の様相を呈することとなる。そして「すこし心をとめたるやうにて、月ごろになりゆく。」と最後はなるのである。「最後は」と言うのは、この次は例の上巻における記事の欠落時期の部分になるからである。

九

最後に、叙述面についても考えておきたい。特に『蜻蛉日記』や『更級日記』などの日記文学の場合、作品論と作家論を分けるのは難しく、また、強いて分けなくてもよいかもしれない。いずれにせよ、本稿での検討は、作家論に立った分析になろう。道綱母の実人生、就中兼家との関係の中でどのような感情を抱いていたか、その際和歌特に兼家との贈答歌がどのような意義を持っていたかを考えたのである。翻って作品論となると、それを道綱母がどう叙述したかが問題となる。そこを簡潔に言えば、本稿で取り上げた兼家との関係

が修復に向かう面などになるべく目に立ちにくいようにしていたと思うわけである。注(17)で触れた『後拾遺和歌集』に採られた贈答歌や、注(19)で触れた兼家の長歌の後に「とか」と記すのなども、この線で説明できると思う。よって、本稿で取り上げた場面も、特に波線部などは、私のように分析するのではなく、文字通りに解する、即ち、怒りが収まらずに兼家に返事する気はなかったが侍女達に咎められたので歌を贈った、と解した方が道綱母の意図に沿っていると思うのである。

叙述面ではもう一点、46く57番の一連の贈答歌の応酬の場面全体とも拘わる問題も指摘しておきたい。こちらの方が大きな問題となるかもしれない。それは、既に述べているが、町の小路の女に対する憎悪を述べる冒頭で「かうやうなるほどに、かめでたき所には、子産みていより、すさまじげになりにたべかめれば、人憎かりし心、思ひしやうは……」と言っていることからして、町の小路の女が零落していくのと、贈答歌の応酬の場面とは、同時進行であった筈なのに、町の小路の女の零落を贈答歌の応酬の場面では記さないことである。それを書かないと歌の贈答がなされた背景が伝わらず、贈答歌が遣り取りされた意義も正確には伝わらないであろうのに、書かないことである。

一方同時に、町の小路の女の零落を言うのは「すさまじげ」一言で済ませ、急ぎ「人憎かりし心……」と言つて憎悪の感情を書き連ねていく点にも注意される。引用は差し控えるが、

町の小路の女に対する憎しみはつらつらと書き連ね、眨めるためには出自にまで言及し、夭折した罪なき乳児にまで触れるにも拘わらず、方や事態が自分にとって好転する面は抽象的にあつたりとしか書いていないわけだ。

纏めて言うと、自分にとって事態が好転する面はここまでの時系列の中からは外してここで纏めて抽象的に記す一方で、町の小路の女に対する憎しみの情は前面に浮き出る書き方をしているのである。

このようなことが、46く57番歌の場面でも、仕立物の依頼からの怒りを道綱母が引きずっているとの理解に繋がるのだと思う。やはり道綱母は、少なくとも上巻の前半では、自分の不幸感が浮き出るような叙述を目指していたとみなくてはならない。

本稿では、46く48番歌が遣り取りされた場面を取り上げ、このような叙述の奥から読み取れる道綱母の真の感情、乃至は道綱母と兼家の真の夫婦関係の一端に対して考察を試みたものである。

【注】

(1) 『言語文化研究徳島大学総合科学部』第16巻・二〇〇八年一二月。

(2) 『蜻蛉日記』の引用は、角川文庫『蜻蛉日記』(柿本 堯氏著、一九六七年一月)により、傍線等は私に付した。和歌には歌番号と詠者を記す。なお、本稿で引用・

言及する『蜻蛉日記』の注釈は、それぞれ次の略称による。

「注解四」―「注解十一」―「注解十二」―「蜻蛉日記注解」
 (秋山虔・上村悦子・木村正中氏、『国文学解釈と鑑賞』・至文堂)。

「注解四」―27巻9号・一九六二年八月。

「注解十一」―28巻4号・一九六三年三月。

「注解十二」―28巻5号・一九六三年四月。

「全注釈」―『蜻蛉日記全注釈上巻』(柿本奨氏著、一九六六年八月・角川書店)。

「集成」―新潮日本古典集成『蜻蛉日記』(犬養廉氏著、一九八二年一〇月・新潮社)。

「古典編」―日本の文学古典編8『蜻蛉日記』(増田繁夫氏著、一九八六年九月・ほるぷ出版)。

「新全集」―新編日本古典文学全集13『土佐日記蜻蛉日記』

(『蜻蛉日記』は木村正中・伊牟田経久氏担当、一九

九五年一〇月・小学館)。

(3)『王朝女流日記論考』(一九九三年一〇月・至文堂)「第五章 日記文学における和歌(その2)―女からの贈歌―」並びに、「第八章 『蜻蛉日記』の一解釈―「なほもあらじ」考―」参照。引用は、第八章から。

(4)道綱母の歌語り享受に関しては、拙稿「兼家の嘘の言い訳を求める道綱母の歌語り享受―道綱母対町の小路の女と恵子女王対好古女―」(『言語文化研究徳島大学総

合科学部』第14巻・二〇〇六年一二月)、並びに、拙著『歌語り・歌物語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』(二〇〇七年一〇月・和泉書院)「第二章 第一章 『蜻蛉日記』上巻の最初の引歌表現―いかにして網代の氷魚にこと問はむ―」参照。

(5)『解釈』二〇〇九年三、四月号・55巻3、4号・二〇〇九年四月。

(6)この点は既に森田兼吉氏が、「返し、いと古めきたり」「例のつれなうなりぬ」(『日記文学の成立と展開』(一九九六年二月・笠間書院)「第一部 古代の日記文学 第二章 『かげろふの日記』を読む」)で、「この頃すでに兼家の町小路の女への熱愛はさめていたのである。」と端的に指摘しているが、従来あまり重視されていなかったと思う。なお、同論文からは、「このあたり、二人の仲を取り結ぶものとして、和歌が有効な働きをしていることが目につく。」など、参考にさせていだいたところが多い。

(7)注(4)拙著「第一部 III 第一章 上巻欠文部の養女問題考 第一節 養女問題執筆削除の可能性」。

(8)「古典編」は、「こんなに町の小路の女を憎む理由の第一は、やはり兼家の妻たちの順位争いによるものである。(中略)後から現われた町の小路の女には、追われる立場にいることもあって、憎悪をむき出しに見せたのであろう。種姓の賤しいことをいうのも、かえって孫

王という身分に作者が劣等感を持っていたからである。」などと指摘している。

(9) 中巻三年目九七一年一月八日頃、次のような記事がある。

また、二日ばかりありて、「心の怠りにあれど、いと事繁きころにてなむ。ようさり物せむに、いかならむ。恐しさに」などあり。「心ちあしき程にて、え聞えず」と物して、思ひ絶えぬるに、つれなく見えたり。あさましと思ふに、うらもなぐたはぶるれば、いとねたさに、こゝらの月ごろ念じつることをいふに、いかなる物も、絶えていらへもなくて、寝たるさましたり。

ここでは道綱母は本気で怒っているのだが、兼家は、傍線部を見るに、本稿の当該の場面と同じようなことを手紙で言ってくる。そして、波線部のような態度に出るのである。これを磊落な態度と言つてよいかどうかは問題な気もするが、冗談がちな兼家の性格はよく表れていると思う。翌月二四日にも次のようにある。

夕づけて、いとめづらしき文あり。「いと恐しきけしきにおちてなむ、日ごろ経にける」などぞある。返りごとなし。

当該場面がこれらと同じなら、道綱母は当該の場面でも本気で怒っていることになるが、中巻では本気で怒る道綱母にも冗談を飛ばす兼家だから、相手が本気でないと

思うと、当然のごとく冗談で応じてくるものとみるのである。

(10) 中巻二年目九七〇年六月に次のような記事がある。兼家の手紙の文面から引く。

「文ものすれど、返りごともなく、はしたなげにのみあめれば、つゝましくてなむ。今日もと思へども」などぞあめる。これかれ、そゝのかせば、返りごと書く程に、日暮れぬ。

ここでは本気で返事を書く気ではない道綱母が、侍女達の勧めで返事を書いており、私の分析する侍女達の態度とは合わない。しかし、中巻二年目になると、本稿の当該の場面よりも大分時間も経ち、道綱母も齢を重ねているし、それに対する侍女達の振る舞いにも変化が生じているであろう。第一、侍女達の少なくとも何人かは入れ替わっているだろう。また、道綱母と兼家の夫婦関係も変化しているのは当然である。私が解釈掲載稿で分析した侍女の態度は、あくまでも上巻の前半あたりを中心に、せいぜい上巻の後半あたりまでを分析したものであり、それ以後についてはまた改めての分析が必要であると思つている。解釈掲載稿では紙幅の都合上、中巻以降の侍女について触れることができなかったもので、ここで補つておきたい。なお、『蜻蛉日記』全体の侍女の役割に注目した論として、石原昭平氏「蜻蛉日記作者の周辺—侍女の言動と作者の意識—」(『東横学園女子短期大学

紀要』10・一九七二年二月）、同「蜻蛉日記作者の内面と外界―中巻末の意識と侍女の視点を軸として―」（『物語・日記文学とその周辺』一九八〇年九月・桜楓社）、石坂妙子氏『蜻蛉日記』の表現構造―侍女の役割に着目して―（『中古文学』32・一九八三年十一月）がある。

(11) 40番歌は「矢」と感動詞「や」を掛詞にした誹諧歌である点に注意すべきである。前号掲載稿・解釈掲載稿も含めて私論で問題とする和歌は『古今和歌集』で確立された正当な歌風の歌である。よって、兼家に誹諧歌を贈ったことを、それと同列に論じるわけにはいかない。

(12) 43く45番の贈答歌は、九五七年の春に遣り取りされているが、九五五年九月に町の小路の女への手紙を発見してから大分経つし、その前の記事からも数ヶ月経過している。所謂一夫多妻の世の中にあつて、町の小路の女の出現に衝撃を受けた道綱母も、流石に一時気持ちが悪く落ちてきたので成り立ったのがこの贈答歌ではないか。ちなみに、この後すぐに町の小路の女の出産の場面があり、再び道綱母の感情は激しいいき、歌を詠めなくなるのである。

(13) 当該の場面でも、兼家からの手紙に歌が添えられていなかったことが、道綱母には不満だったのかもしれない。もう少しそうなら、その不満も傍線部の反応を示した理由に含まれるであろう。

(14) 久保田淳・平田喜信氏著、一九九四年四月・岩波書店。なお、『後拾遺和歌集』の歌番号は、『新編国歌大観』による。

(15) 注(13)で述べたように、当該の場面でも兼家からの手紙に歌が添えられていなかったことに道綱母が不満を覚えたとすれば、前号掲載稿で取り上げた同様の場面では不満を覚えつつ「女からの贈歌」になっている一方、当該の場面では不満を覚えつつも「歎き」などを訴える必要は感じず「女からの贈歌」になっていないのだから、一貫していない。でも、当該の場面では、町の小路の女が寵を失っていく様子に勘づいた道綱母の機嫌が直りつつある時、乃至は、直り始めた時である点が重要だと考える。よって、前号掲載稿で取り上げた場面と一貫性がないのはむしろ当然ではないか。

(16) 36く38番歌が詠まれた際の道綱母の態度からすると、自分の歌は贈答歌ではなくあくまでも独詠歌としておきたいという気持ちが窺える。前号掲載稿第六節、及び注(20)参照。

(17) 前号掲載稿では、兼家が自分に愛情を示している様子や自分が兼家にひかれていく様子などはなるべく書こうとせず、不幸な様子を強調しようとする道綱母の執筆態度も問題にしたが、『後拾遺和歌集』に採られている贈答歌が『蜻蛉日記』に載せられていない理由も、この線で考えられると思っている。そのことは前号掲載稿の注

(17) で少し触れたが、改めて纏めて考察する必要もあると思つてゐる。

(18) 45 番歌の前にも「使あれば」とあり、この後少し言及する長歌の贈答(58 59 番)に引き続き贈答歌の応酬(60 64 番)の最初の所にも「使あれば、かくものす。」とある。贈答歌を三首以上続けるには、使いが残つてゐるとか、その他であつても、何らかの理由めいたことが必要だとの意識が道綱母にはあつたのだろうか。今後検討すべき問題だと思ふ。

(19) 注(18)でも触れたが、60 番歌の前にある「使あれば、かくものす。」の「使あれば」を、59 番の兼家の長歌を持つて来た使いがまだいたので、と私は解す。つまり、58 59 番の長歌の贈答と以下の贈答歌の応酬は連続すると見なすのである。これには異論も少なくなく、例えば「新編全集」は、「長歌の応酬は「…とか」で結ばれ、「使ひあれば」は、折り返しの返歌ではないことを示す。」と指摘する。道綱母が実見した筈の兼家の長歌の直後に「とか」とあることを問題にした上での指摘である。私はこの「とか」も、注(17)で述べた通り前号掲載稿で言及し、本稿第九節でも言及する、自分が満足したことは曖昧に記そうとする道綱母の執筆態度から説明できると考へてゐる。つまり、宮崎莊平氏が「蜻蛉日記上巻の長歌をめぐって」(『論叢王朝文学』一九七八年十二月・笠間書院)で提示した論に従うのである。よつて、長歌と

以下の贈答歌の応酬は連続すると見なして構わないと考へる。いずれにせよ、詳しくは別の機会に論じたい。

【付記】

新典社新書『和歌を力に生きる—道綱母と蜻蛉日記—』(二〇〇九年一〇月)を上梓した。この拙著と本稿の内容は一部重なつており、拙著を読んで頂くと本稿では紙幅の都合上十分に論じられなかつたところを補うことにもなると思ふ。一方、執筆の段階より本稿で読みを深めたつもりのところもある。